

2004年度1学年国語総合 1学期期末考査

この問題用紙は「ファイル」に「とじて保存すること」。(とじていない場合はファイル提出不合格となる。)
字は丁寧に濃く書くこと。極端なくせ字、汚い字、読みとれない字の場合は減点の対象になる。
漢字を使うこと。常用漢字を書かない場合、減点の対象になる。
文章を書くときには句読点「。」や「、」を絶対に忘れないこと。 ついてない場合は減点の対象になる。
全ての解答は解答用紙の決められた解答欄に記すこと。

次の文章について後の問いに答えなさい。

そのかわりまた、からすがどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、そのからすが、何羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。(エ)ことに門の上の空が、夕焼けで赤くなるときは、それがごまをまいたように、はつきり見えた。からすは、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついにばみに来るのである。もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、ところどころ崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、からすの糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした(フ)コンの襖の尻を(ハ)据えて、右の頬に出来た、天きなにきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。普段なら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に(ニ)暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町はひととおりならず衰微していた。今この下人が、長年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから、「下人が雨やみを待っていた。」というよりも「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」というほうが、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の

Sentimentalism に影響した。申の刻下がりから降り

だした雨は、いまだに上がる。(ニ)気色がない。そこで下人は、何をしておいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、(ロ)とりとめもない考えを、たどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあという音を集めてくる。夕闇はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した甍の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいいとまはない。選んでいれば、(ハ)薬土の下か、(ニ)ミチバタの土の上で、飢え死にをするばかりである。そうして、この門の上へ持つてきて、犬のように捨てられてしまえばかりである。選ばないとすれば、下人の考えは、何度と同じ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ(ニ)達着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないということ(ニ)を(ニ)「コウテイしながらも、この「すれば」の(ニ)かたをつけるために、当然、その後に来たるべき「盗人になるよりほかにしかたがない。」ということ(ニ)を、積極的にコウテイするだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きなくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。丹塗りの柱にと

まっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまうた。

下人は、首を縮めながら、山吹の(セ)汗衫に重ねた紺の襖の肩を高くして、門の周りを見回した。雨風の憂えのない、人目にかかるおそれのない、ひと晩寝られそうなおそれがある。そこで(ニ)ともかくも夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つたはしが目についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰に下げた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、わら草履を履いた足を、そのはしこの一番下の段へ踏みかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしこの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上のようなすをつかがつていた。

楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持つたにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと(ニ)たかをくくつていた。それが、はしこ(ニ)二、三段上つてみると、上ではだれか火をとぼして、しかもその火をそこにと、動かしているらしい。これは、その濁つた、黄色い光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

問一、(ニ)部(ニ)の語を別の言葉や単語を使って、もとの文章表現の意味が変わらないようにして言い換えなさい。

問二、(ニ)部(ニ)を、漢字はその読み方をひらがなで記し、カタカナは漢字に直して記しなさい。

問三、(ニ)部 の「下人が雨やみを待っていた」という表現と、「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた」という表現では、下人の気持ち表現する上で、どのような違いがあるか、説明しなさい。

問四、(ニ)部 下人の「Sentimentalism」が風景描写に現れている部分がある。そのうち比喻表現が使われている風景描写を2カ所抜き出しなさい。

問五、(ニ)部 「風は門の柱と柱との間を、夕闇とともに遠慮なく、吹き抜ける。」。「楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。」はそれぞれ比喻表現であるが、その比喻の種類を記し、その比喻表現を除いた通常の表現で書き換えなさい。

次の文章について後の問いに答えなさい。

下人は、やもりのように足音を盗んで、やっと急なはしごを、一番上の段まではうようにして上りつめた。そうして体をできるだけ、平らにしなが、首をできるだけ、前へ出して、おそろおそろ、楼の内をのぞいてみた。

見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、いくつかの死骸が、(一)ムソウサに捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数はいくつともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男も混じっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影をいつそう暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。

下人は、それらの死骸の(二)フランクした臭気にも思わず、鼻を覆った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を覆うことを忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の(三)嗅覚を(ヒウバツてしまったからである。

下人の目は、そのとき、初めてその死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をもした松の木切れを持っていた。その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸である。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、(四)暫時は息をするのをさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子の尻を取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい(五)憎悪が、少しずつ動いてきた。いや、この老婆に対する

といつては、(六)ゴヘイがあるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、だれかがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、飢え死にするか盗人になるかという問題を、あらためて持ち出したら、おそらく下人は、なんの末練もなく、飢え死にを選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がりだしていたのである。

問一、部「やもりのように足音を盗んで」から暗喩を指摘し、比喩を除いた通常の表現で書き換えなさい。

問二、部「土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。」には、直喩と擬態法が含まれている。それぞれ指摘し、そこで使われている直喩表現の効果を詳しく説明しなさい。

問三、部「ある強い感情」とは何か、文中より抜き出しなさい。

問四、部「猿のような老婆」とあるが、

「猿」によつて老婆のどのような姿や様子を表現しているか、思いつく限り個条書きで書きなさい。

問五、部「この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がりだしていたのである。」には、暗喩が含まれている。その暗喩表現の部分を直喩表現に書き換えなさい。

問六、部(一)セを、漢字はその読み方をひらがなで記し、カタカナは漢字に直して記しなさい。

次の文章について後の問いに答えなさい。

下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、冷然として、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。(二)しかし、これを聞いていたうちに、下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさつきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動くこととする勇気である。下人は、飢え死にするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。そのときの、この男の心持ちからいえば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が終わると、下人はあざけるような声で念を押した。そうして、ひと足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、おれが引剥をしようと思ひまいな。おれもそうしなければ、飢え死にする体なのだ。」

問一、部「下人の心には、ある勇気が生まれてきた。」とあるが、「生まれた」という表現は、「出てきた」という表現とどう違うか、説明しなさい。

問二、部「この老婆を捕らえたときの勇氣」を問題文も参考にしてそれぞれ簡潔に説明しなさい。

問三、部は下人の「にきび」についての表記である。問題文にある「大きなきびを気にしながら、」楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。問題文の「もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなきびを気にしながら、聞いているのである。」というように、「にきび」との接触が描かれていたが、最後では、「不意に右の手をにきびから離して」と、「にきび」との離脱が描かれている。

「にきび」を換喩表現であると考えたと、何を表現しており、「にきびから手を離す」というのはどういうことが、理由を明示しながら説明しなさい。(字数が多ければ得点は増えます。ただし、誤字、脱字、常用漢字の平仮名書きは字数に含まれません。)

問四、「羅生門」全体を通して、下人と老婆に使われている比喩表現の違いから、作者の下人と老婆の描き方の違いを説明しなさい。(授業で学習したこと全体をふまえて記すこと。)

解答用紙にある漢文の問題に答えなさい。